



No. 184

ティーブレイク

Tea Break

ほっとプレート

会員 正林 真之

ウィークデイは、会食その他で何のかんの言って外食となる。けれども、ウィークエンドはウィークエンドで、家族の皆が外で食べたいと言うので、結局は一週間の全てが外食となる。「そんなだと、“家庭の味”が恋しいでしょう?!」。そんなことをよく言われる。

けれども、家庭の味ってなんなのだろうと思う。実は母親が料理が苦手であったので、おふくろの料理がうまかった経験がなく、あまり感慨がわかない。

また、昭和の時代には、外食というのは、たいそう贅沢で、そうそう簡単にはできなかったのである。食事に何が出たとかは一々覚えていないし、外食は外食で、本当に美味しかったものの数シーンしか覚えていない。

ただ、よくよく思い起こしてみれば、家の中ではよく鍋や焼き肉をしたものだ。鍋は鍋で、湯豆腐とか、ちょっと贅沢なときにはしゃぶしゃぶとか、そんな感じである。また、焼き肉をするのは、ホットプレートという原始的な機器で、ただ単に加熱をするだけの代物である。あれらは一体どこに行ってしまったのか。母が亡くなってからは、その行方すら知らない。家族の思い出とともに無くなってしまったようだ。

なのに、鍋をつついたり、焼き肉をしたりということは、なぜかよく覚えている。それはただ単に、その回数が多かったから、記憶に定着しているのだと思っていた。そして、その「回数が多かった」理由としては、自分なりに、母が病弱であったことから、食事の苦勞を減らすために、そうしていたのだと思っていた。

とはいえ、それは後から顧みて思ったことであり、当の子供時代の自分は、今夜は焼き肉だとか、鍋だとかが決まると、なぜかわくわくして食材を買いに行ったものだ。

けれども今は、そうした自分が、今度は親の立場に

立って、目の前で焼き肉を焼いている子供たちを見ている。「いつも親が焼いてくれたのを待っていたこの子らが、いつから自分たちでやるようになったのだろう...」とそんなことを思いながら見ていると、姉弟が本当に仲良く焼いている。ときには譲り合いながら、ときには「どっちの肉だ。どっちの領地だ」とか言いながら、そんなことをしながら、じゃれあっている。

その様子を見ながらも、「こんなこの子らも、いずれは別々に住み、別々に生活することになるんだよな...」。そんなことを、ふと思う。そしてまた、隣の妻も、そんなふうに見えるように見える。そう、今のこの子らの年齢からして、「その日」はそんなに遠くはないのである。

よくよく思い起こしてみれば、子供の時期には、子供時代がずっと続くものだと思っていた。いや、正確には、頭ではいつかは終わりが来ることは理解していたのであるが、なぜか感覚がついていかない。学校とて、卒業することは自明の理なのであるが、だからといって、授業の一コマ一コマを大切にしようなどとは思えないのが普通だろう。

けれども、もはや大人になった自分は、こうして仲良くしている姉弟も、いずれ別離し、そして二度と元に戻らないことを知っている。そう、それは不可避なのだ。だからこそ、こうやって姉弟が仲良く食べる姿が微笑ましい。

焼き肉というのは、本当は、そんなに焼きすぎではいけない。けれども、子供らの焼き方は、それこそ、てきとうである。生焼けのままのところがある一方で、焦げてしまっているところもある。でも、それでいいのだ。だいたい、事業としてのステーキの焼き方や出し方が特

許になることはあっても、こんなふうな私的な焼き肉の焼き方などは特許になることはない。それに、こんなふうにワイワイやりながら囲む食卓なんて、もう、あとは数えるほどしかないのだ。たとえ特許権侵害だと言われてたとしても、継続したいくらいだ。

よくよく思い起こしてみれば、あの頃の親父とて、そのことが分かっていたのだ。それも、あと数回であることが分かっていたからこそ、自分が高校生の頃には、何かと鍋や焼き肉が多かったのだろう。目の前のホットプレートに負けないくらいの温かさのある家庭というものにタイムリミットがあることを、そのことを自らの体験で知りすぎるほど知っていたのである。

けれども、当の子供らには、それが分からない。そして、当の子供らが分からないことは、この自分の体験からしてよくわかる。目の前のコンロは、またスイッチを

入れればよいと思っているし、またこのレストランに来ることが、ずっと続くと思っている。そしてまた、そう思っている子供たちを見るのが、これまた意外に楽しく、そんなピーターパン的な心情に対して、あえて現実の風を入れることによってそれを壊そうとは、到底思えないのだ。

とはいえ、おなかがいっぱいになって、デザートが来れば、もう焼肉も終了。楽しいひと時が終わる。子供らの自立を願う親のほうとしては、将来のこの子らの行く末についての不安が無いわけではないが、なぜか、ほっとする。そしてまた、一人暮らしも、子供の居ない時期も経験したから分かるのであるが、この温かさが何とも言えない。

どうやら、今も昔も、子供たちによって暖められていたのは、肉や野菜だけではなかったらしい。